耳目記

芥川龍之介

×

僕等の性格は不思議にも大抵頸(たいていくび)すぢの線に現はれてゐる。この線の鈍(にぶ)いものは敏感ではない。

×

それから又僕等の性格は声にも現れてゐる。声の堅いものは必ず強い。

×

筍(たけのこ)、海苔(のり)、蕎麦(そば)、——かう云うものを猫の食ふことは僕には驚嘆する外(ほか)はなかつた。

×

或狂信者のポルトレエ——彼は皮膚に光沢(くわうたく)を持つ

てゐる。それから熱心に話す時はいつも片眼をつぶり、銃でも狙(ねら)ふやうにしないことはない。

×

僕は話に熱中する度に左の眉(まゆ)だけ挙げる人と話した。ああいふ眉は多いものかしら。

×

僕は教育なり趣味なりの大抵(たいてい)同程度と思ふ人々に何枚かの女の写真を見せ、一番美人と思ふのを選んで貰つた。が、二十五人中同じ女を美人と言つたのはたつた二人ゐただけだつた。即ち女の美醜(びしう)を定(き)めるのさへ百分の四以上を超(こ)えないらしい。しかもこれは前に言

つたやうに教育なり趣味なりの程度の似よつた人びとの間（あひだ）だけである。

×

或果物問屋（くだものとんや）の娘の話。――川に西瓜（すゐくわ）が一つ浮いてゐると思つたら、土左衛門（どざゑもん）の頭だつたのです。

×

僕は肥（ふと）つた人の手を見ると、なぜか海豹（あざらし）の鰭（ひれ）を思ひ出してゐる。

×

僕は女の人生の戦利品を三つ記憶してゐる。

一つは長女に後（うしろ）を向けて次男に乳をのませてゐる

女親。
一つは或女給の胸に下（さが）つたいろいろの学校のメダルの一ふさ。
一つは或玄人上（くろうとあが）りの細君（さいくん）の必ず客の前へ抱（だ）いて来る赤児。

（昭和二年四月）

底本：「芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
１９７１（昭和46）年10月５日初版第５刷発行
入力校正：j.utiyama
１９９９年２月15日公開
２００３年10月７日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。